

土木広報センター

土木広報センターは、土木広報戦略会議の基本方針に基づき、自らが主体となる活動の実施（「土木の日」の活動を含む）、各委員会や支部、関係団体が主体となつて行う活動との連携・調整、情報共有・発信などを行うことを目的とする。

令和三年度 土木の日および
くらしと土木の週間 報告

令和三年度の「土木の日」および「くらしと土木の週間」は、新型コロナウイルス感染症感染防止の観点から、オンラインを活用したイベント開催を行うなど、各地で工夫を試みながら実施しました。

1987年11月18日に「土木の日」を制定してから、2021年11月18日で34周年を迎えました。各支部や各関係団体の多大な協力を賜り、「土木の日」が全国的に浸透してまいりました。土木広報センターとしましても、一般の方々に社会資本の重要性を認識していただけるよう継続していく所存です。今後とも本行事に関しまして、多くの方々のご理解やご協力を賜りますようお願いいたします。また、ご尽力いただきました多くの皆さま方に心からお礼申し上げます。

本部

土木の日シンポジウム
2021

2021年11月14日（日）、「土木の日シンポジウム2021」を開催した。本年はコロナ禍ということもあり、オンライン形式で実施した。

本年度は、「グリーンインフラと市民普請〜自然のなかでいきる技術のあり方〜」をテーマに議論を行った。具体的には、自然や地域をうまく生かしたグリーンインフラ技術をとりあげ、市民普請が持つ「自然のなかでいきる新しい技術体系」の価値を探り、社会に実装する方法について、国内外でグリーンインフラを実践してきた方々

とともに議論を行った。

開会に先立ち、土木広報戦略会議土木の日実行担当である廣瀬昌由氏（国土交通省大臣官房技術審議官）より開会あいさつが行われた。廣瀬氏は、近年、人口減少の局面の中でいかに生産性を向上していくか、新しい技術にトライしていく土木の力の結集へ期待を示すとともに、道普請や流域治水のように各インフラ分野においても、あらゆる関係者が主体的に参加していくことの重要性について触れ、「市民普請」の今後の貢献に期待を寄せた。また、カーボンニュートラルが加速する世界各国の中で、日本も市民普請の取り組みを通じてグリーンインフラの実装を加速させていくことの重要性を示された。また、土木学会の谷口博昭会長より会長あいさつがあった。谷口会長は、土木はこれまで暮らしや経済活動の時のニーズに応じて技術開発、改善を進めながら社会の発展に貢献してきたことに触れ、これからもこれまでと同様に、イノベーションを促進しつつ、土木事業を展開するのが肝要と述べた。その上で、コロナ後の日本創生を見据え、土木の「ビッグピクチャー」の提言をとりまとめている最中であることを紹介し、今回のシンポジウムの内容である、グリーンインフラや市民普請の考え方についても含まれたものになる

ことに期待を寄せた。

また、市民普請の議論のためのイントロダクションとして、中村圭吾市民普請グループ幹事長（土木研究所）より「市民普請について〜これまでの振り返り〜」について話題提供が行われ、その後、各実践者より話題提供が行われた。基調講演として、同グループ副幹事長の真田純子氏（東京工業大学）からは、「自然のなかでいきる技術のあり方を問う」について、話題提供があった。真田氏は、農地の石積み修復する実践や空石積みを公共事業に適用するための研究を行っており、それらを紹介しながら講演がなされた。具体的には、公共事業における石積み消失した歴史的背景には近代土木のシステムに伝統的な技術を組



写真1 パネルディスカッションの様子



写真2 講演者の皆さま

み込めなかったこと、農地など市民による石積みは地域の材に合わせて積み方を工夫していることなどについて紹介した。それらを受けてグリーンインフラなどの自然物を用いた工事にとって重要なこととして、「強さ」の定義の再検討、現在の価値観の客観視（標準化した材料、計算可能＝強い、など）を挙げ、自然を「主」と捉える市民普請（経験知）を現代的に再評価する視点が重要であると述べた。

次に、松木洋忠氏（土木研究所）からは「現地材料と地元技術で現場土木」というテーマで話題提供が行われた。松木氏は、国内や海外（ラオス、ベトナム）の河川の現場での技術者としての取り組みをされており、①ラオスの石、②ベトナムの竹、③日本の現場発生材、④公共事業と市民普請

について、現場で調達可能な材料をテーマとしながら紹介した。松木氏は、公共事業と市民普請の性質の比較として、公共事業は、「ココマデハヤル」、「品質保証」、「計画通り」、「変形変質に不寛容」、「Lifecycle cost」という性質に対し、市民普請は「デキルだけケヤル」、「現状改善」、「思った以上」、「手入れと手直し」、「Repairability」と紹介し、利用と管理の面においては両者の良いところどりで持続力が生まれると述べた。

次に、瀧健太郎氏（滋賀県立大学）からは、「水辺の小さな自然再生」と支える仕組みについて話題提供が行われた。瀧氏は、河川における小さな自然再生に関する取り組みを実践しており、その事例や流域治水におけるグリーンインフラの活用などについて紹介した。その中で瀧氏は、「小さな自然再生などの取り組みは、市民普請の出番であるが、それに対して、行政がどこまで任せられるか、どこまで行政計画に盛り込めるかなど、技術的かつ政策的な判断が重要」と述べた。

次に、設案知弘氏（毛利建築設計事務所）、共同発表者の徳永達己氏（拓殖大学）から、「地産地消型の道路舗装…エチオピアの石畳舗装」について話題提供がなされた。設案氏は、エチオピア、パレスチナ、スリランカ、コンゴなどにおいて、ODA事業における

学校建設などに携わってきており、それらの経験をもとに、現地の材料を用いた石畳による道路舗装について紹介し、地産地消型の取り組みで、環境への負荷も低く、地域経済やコミュニティにも貢献している点においても高く評価できると述べた。本内容について徳永氏からは、アフリカをはじめとする開発途上国においては、「LBT (Labour Based Technology：労働力を主体とする施工技術)」を用いた道路アセツトマネジメントが導入されていることを紹介し、住民参加のインフラ管理がさまざまな現場で応用可能であることを述べた。

パネルディスカッションでは「グリーンインフラ推進のための市民普請の役割」という内容で議論が展開された。講演者4人（真田純子氏／松木洋忠氏／瀧健太郎氏／徳永達己氏）とコーディネーター中村圭吾氏で議論が行われた。参加者からの質問への回答も交えて行われ、一例を挙げれば「住民の主体性を向上させるためにはどんな工夫が大切か？」に対しては、瀧氏から「ワクワクする活動をする。やったことが役に立っている、やれば変わるという成功体験をすること」との回答があった。主な議論として、伝統的な技術体系と近代的な技術体系、公共事業の技術体系と市民普請の技術体系など相対するかに見える技

術体系があるが、それぞれを自覚し互いをうまく取り入れていくことが必要、その地域・環境・自然に対して技術を工夫しメンテナン可能な技術を取り入れることが持続可能な地域づくりにつながる、これらの技術をグリーンインフラに展開することへの期待、また行政には対話する力が求められ、時には行政の立場から離れて市民と一緒に地産地消をよくなる市民普請に参加することも対話力を高めることになること、等が話された。市民普請という観点からではあったが土木やインフラ整備に対して改めて問題提起がなされた。

最後に土木学会専務理事塚田幸広氏から、本日の議論が楽しげに話されていてとても説得力があったこと、さまざまな事例が皆さんの悩みの解消につながったのではないかと締めくくられた。

本シンポジウムにはオンラインで400人を超える参加があり、YouTubeの公開動画（土木学会tv）の再生回数も1300回（3月1日現在）を超えている。当日も多数のコメントや質問が寄せられ、市民普請への関心の高さがうかがえたとともに、今後の地域づくりを考える上でも貴重な機会となった。



図1 シンポジウム配信動画（土木学会tv）

北海道支部

北海道支部では昨年引き続き新型コロナウイルスの影響により親子見学会等中止行事もあったが、11月18日に「選奨土木遺産認定書授賞式（糠平ダム、弾丸道路）」・「土木の日」講演会（講演題目…地域防災力の強化～東日本大震災から10年を迎えて～）および座談会（土木のビッグチャートプロジェクト…北海道の未来地図を考える）をYouTube Live 配信にて開催。11月17・18日には北海道土木技術会「土木の日パネル展2021」と同時開催の「イブニングシアター」を札幌駅前通地下歩行空間にて感染対策のため観覧席を設けず開催した。

7月からは、函館、苫小牧、室蘭、北見地区において、関係機関協力のもとに「土



イブニングシアター観覧風景



創造工学Ⅱ測量体験（苫小牧地区）



新橋に名前を
付けよう！（北
見地区）

木の日」関連行事を、感染防止策を徹底して実施した。函館地区では土木実験を体験する「ガールズオープンキャンパス」を開催。苫小牧地区では高専の他専門系学生への土木工学の授業「創造工学Ⅱ」を開催し、土木工学がどのような課題解決に結びついているかを体験してもらった。室蘭地区では水害や土砂災害の仕組みについて模型実験などで説明し、一般市民や子供たちに防災に関心をもってもらう「室蘭市防災フェスタ2021」を開催。北見地区では施工した新橋の名称を地元の小中学生に考えてもらい、土木事業への興味を喚起した。このように各地区工夫を凝らし若手への土木のイメージアップを図り、将来の担い手の育成に努めている。

東北支部

東北支部では、「土木の日」関連特別行事の一環として、2004年度より、巨大地震災害や津波災害、さらには気候温暖化による河川海岸等への影響をテーマとして、防災に関するシンポジウムを開催してまいりました。

本年度は、2021年7月に発生した静岡県熱海市での大規模な土石流災害をはじめ、近年、多発・激甚化する豪雨による地盤・土砂災害に焦点をあて、被害のメカニズムや対策のあり方をテーマとしたシンポジウムをウェビナー形式で開催致しました。

基調講演は、岩手大学の大河正文准教授と山口大学の鈴木素之教授のお二人にお願いしました。大河原准教授には「東北地方の近年の土砂災害について」と題して2016年の台風10号や2019年東日本台風による災害の特徴や最新の研究に関するお話を、鈴木教授には「最近の豪雨災害と地盤技術の今後の動向について」と題して2018年の西日本豪雨災害をはじめ過去の土砂災害の特徴や土石流や洪水の再来する場所や時間についてお話を頂きました。

パネルディスカッションでは、東北大学

災害科学国際
研究所の森口
周二准教授を
コーディネー
ターに、基調
講演のお二人
と、国土交通
省東北地方整
備局河川部長
の國友優氏、
国際航業（株）
東北支社の高
見智之氏の4
人のパネリス
トで、國友氏

からは「豪雨による土砂災害に関する国の取り組み」、高見氏からは「空からの地盤・土砂災害調査」と題する話題提供を頂き、現状の対策や技術を確認するとともに、広域目線での対策や技術の重要性、今後の研究の方向性等について議論していただきました。

昨年度に続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンライン形式での開催になりましたが、限りある時間の中で視聴者とも多くの質疑応答が展開され、参加者には土木に関する関心が高められた機会となりました。



配信風景



講演風景

関東支部

関東支部では、関係機関の協力のもとに「土木の日」の関連行事を実施した。

昨年中止となった現場見学会を初の試みで、中日本高速道路(株)東京支社秦野工事事務所、新東名高速道路川西工事清水建設・岩田地崎建設JV、前田建設工業(株)ICI総合センターにご協力いただきオンラインで開催した。臨場感溢れる見学会となり、参加者から高評価をいただいた。

「親子見学会」に代わるイベントとして昨年実施した「土木を感じる！親子で探検」絵本の世界」を今年も開催した。土木系の絵本を配布して親子に読んでもらい、感想文(自由な発想・方法で土木に対する思いを表現)を提出してもらうことで、子供たちに「土木」に触れる機会を提供する。各親子に『ドボジョママに聞く土木の世界』シリーズの「ダム」・「道路」・



「絵本感想文」入賞作品

「トンネル」から(未就学児は「雨の日の地下トンネル」)題材本を選択していた。な



「写真コンテストカレンダー」

お、本イベントは(一社)土木技術者女性の会(東日本支部)にご協力をいただいた。感想文等は関東支部幹事および女性の会で審査され各賞が決定される。

本年度も会員交流促進の一環として「土木のある風景」写真コンテストを「土木の日」11月18日より募集を開始した。関東支部幹事による審査にて最優秀賞・優秀賞・佳作などが決定される。入賞作品は、カレンダーおよびHPに掲載される。

また、(株)奥村組技術研究所にご協力いただき「技術研究所見学会」を実施し、近所の小学校の児童に建設業の役割や新技術開発の取り組みなど、土木技術に触れて楽しい時間を共有した。

関東支部には、新潟・山梨・群馬・栃木・茨城の五つの分会があり、各分会において記念講演会(動画放映含む)、土木遺産の見学会など各種イベントを実施し、土木工学のイメージアップと市民生活との関係の周知に活発に取り組んでいる。

中部支部

中部支部では、関係機関の協力をいただき、「土木の日」ポスターを作製し、関連行事を10月から12月にかけて実施した。

一つ目は「市民見学会」「親子ふれあい見学会」。これらは土木に対する一般市民の関心を高め、土木施設の役割や必要性を理解してもらうことを目的に企画した事業である。昨年度に引き続き、コロナ感染対策を考慮し、参加定員の削減、消毒検温などの感染対策を取り入れて、10月、11月の開催を目指して計画した。「市民見学会」では、石川県で環状道路やクルーズターミナルの見学、三重県でバイパスや国道拡幅工事の現場見学、「親子ふれあい見学会」では、信州大学で鉄筋や土などの建設材料を使った親子体験実習を企画した。直前のコロナ拡大の影響により、残念ながら、本年度の事業は中止となったが、来年度は現場のライブ配信による現場見学等、新たな



2021年度「土木の日」ポスター



パネル展示 当日の様子

多くの来場者が行き交う催しの場で、約20枚の「選奨土木遺産のパネル展示」を行った。

視点での取り組みも検討しながら、見学会の開催に向けて取り組むよう努める。

二つ目は「選奨土木遺産のパネル展示」。例年、「建設技術フェア2021in中部」の主催企画として展示スペースを設けている。「建設技術フェア2021in中部」は、国土交通省中部地方整備局や名古屋国際見本市委員会、(公社)土木学会中部支部などで構成される運営委員会が主催となり、①産・学・官の技術交流の場を提供し、技術開発や新技術導入の促進に資する。②建設関連産業の振興、技術開発の推進および商取引の拡大を図る。③建設分野を専攻している学生に技術開発の現状と方向性を紹介する。④建設技術の魅力と社会資本整備の必要性を広く一般の方々に紹介する。の四つの目的で開催されている。本年度は12月14日(火)、15日(水)に名古屋市中企業振興会館で開催され、出展者数は約250社・団体、来場者数は2日間であらう1万4000人に及んだ。産・学・官の

関西支部

関西支部では、「土木の日」および「くらしと土木の週間」の活動として、「土木の日」関連行事関西地区連絡会の主催で、さまざまな企画（連絡会行事）を実施した。

「土木の日」ポスター制作では、「わたしの身近にある土木（まち・道路・鉄道・港・エネルギー）」のテーマでポスター募集したところ、計314作品（子供部門187作品、一般部門127作品）と多くの応募があった。選考の結果、北野杏旬さん（大阪市立加美小学校）の作品が最優秀賞となり、土木の日関連行事の広報ポスターに活用した（写真1）。

「土木の日」コア行事のFCCフォーラムは、「関西国際空港の復旧とリノベーション——明日への「もどる力」「活かす力」——と題し、2018年台風21号による

被災からの復旧作業と現在進行中のリノベーションについて話題提供した。会場は

関西国際空港の国際線出発ロビーの、新型コロナウイルスの影響で一時的に閉鎖している発券カウンター前に設置し、同時にネット配信も行なった（写真2）。逆境を逆手に取り、通常では利用できない場所での開催は関西支部らしい斬新な企画となった。

施設見学付きのどぼくカフェが感染拡大の影響で延期となったが、「ドローン空撮で見えてくる日本の地理と地形と土木技術」（講演者：藤田哲史氏）、「未来につながる産業・土木遺産」（前畑温子氏）、「どぼくのスキマで暮らす小さな植物図鑑」（瀬尾一樹氏）、「みんなで作る自由に見える地図 オープンストリートマップの魅力」地図に「残す」活動」と、4つのどぼくカフェをオンラインで開催し、いずれも盛況のうちに終了した。



写真1 2021年度「土木の日」ポスター



写真2 関西国際空港で開催したFCCフォーラムの様子

中国支部

夏休みに小中学生を対象とした「土木」について身近に感じてもらえる簡単な実験を行う、「夏休み土木実験教室」を、令和3年8月4日、東広島芸術文化ホールくららで開催しました。これは、平成26年に関西支部の出前講座から始まった実験教室で、今年で8年目（実施は6回目）となります。内容としては、「コンクリートに関する実験」を行い、水、セメント、砂、砂利を練り混ぜ、自分たちでコンクリートを作ること

で、性状、特徴を理解しました。新型コロナウイルス感染症の対策として、検温・手指消毒・参加者の半減・パーティションの設置・実験器具の消毒・マスク・手袋・防護メガネを着用の上実施しました。

また、次世代を担う子どもたちに、生活の中で何気なく見ている身近な構造物を描くことによって土木に親しむを持ってもらうことや、私たちの暮らしが土木技術に支えられていることを感じてもらうことを目的とした、第14回「身近な土木

木を描いてみよう！」図画コンクールを実施しました。中国5県から小中学生の素晴らしい作品1254枚が寄せられ、優秀賞13点と佳作53点を選考しました。優秀賞を対象とした表彰式は、広島、岡山で行われ、水島賢明支部長より、優秀賞者へ表彰状と優秀作品を掲載した2022年のカレンダーを贈呈しました。展示は、土木学会本部や、広島・鳥取・岡山・島根・山口で行いました。地域の橋や、工事中の現場、災害復旧の様子を描いた作品もあり、中には父親の仕事の様子など、ほほえましい作品もみられました。

木を描いてみよう！」図画コンクールを実施しました。中国5県から小中学生の素晴らしい作品1254枚が寄せられ、優秀賞13点と佳作53点を選考しました。優秀賞を対象とした表彰式は、広島、岡山で行われ、水島賢明支部長より、優秀賞者へ表彰状と優秀作品を掲載した2022年のカレンダーを贈呈しました。展示は、土木学会本部や、広島・鳥取・岡山・島根・山口で行いました。地域の橋や、工事中の現場、災害復旧の様子を描いた作品もあり、中には父親の仕事の様子など、ほほえましい作品もみられました。



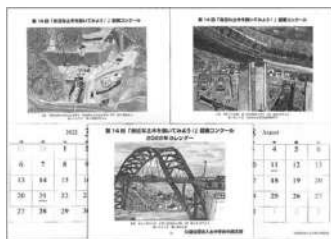
「夏休み土木実験教室」



第14回「身近な土木を描いてみよう！図画コンクール」表彰式（広島）



第14回「身近な土木を描いてみよう！図画コンクール」展示（広島）



優秀作品を掲載した2022年のカレンダー

四国支部

四国支部では、新型コロナウイルス感染症の影響により本年度も大学や高専等での土木パネル展やバスツアー等一部の行事については中止せざるを得なくなりましたが、それ以外の土木の日関連行事については土木に対するイメージアップを図るため、関係機関のご協力のもと一般市民、地域住民、小中学生・高校生等を対象に四国の各県内で10月から11月にかけて行事を開催した。

徳島市では、11月25～26日にかけて四国建設広報協議会主催の「建設フェア四国2021 in 徳島」において、市民や建設業界の方々などを対象に建設フェア会場内で「四国の土木コレクション展」を開催するとともに、26日には土木の日記念



四国の土木コレクション&土木遺産パネル展



選奨土木遺産認定書授賞式



特別講演会での会場の様子

行事として「選奨土木遺産認定書授賞式」

(千賀居隧道 愛媛県八幡浜市) および東

京大学大学院工学系研究科野口貴文教

授による「2050カーボンニュートラ

ルに向けたセメント・コンクリートの役

割とCCCの現状」と題した特別講演を

対面とオンラインの併用で開催した。

愛媛県大洲市においては11月13日に市

民や学生に土木に興味や関心を持つて

らう事を目的とした「肱川を巡る 近代土

木遺産巡りバスツアー」を実施した。

主な地区行事としては、各県において

小中学生や工業高校・高専生を対象に土

木・建築現場の見学会を実施し、またオ

ンライン方式により科学体験フェスティ

バルを開催するなど、建設産業および社

会資本整備への一般理解の醸成、建設産

業への魅力発信などに努めた。

西部支部

九州沖縄地域では、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)感染防止の観点より、福岡地区、佐賀地区等で従来型のイベントが中止となった。

熊本地区では、「令和3年度 絵画・写真コンクール」が開催され、入賞作品が11月8～26日に熊本県庁1階ロビーに展示された。



土木の日パネル展(宮崎地区)



「沖縄の土木技術を世界に発信する会」シンポジウム(沖縄地区)

長崎地区では、11月15日より「DOVO Cフェア2021」として、Web (<https://dovoc.jp>)上でオンラインパネル展を開催した。

宮崎地区では、11月20～21日にイオンモール宮崎で「宮崎県「土木の日」パネル展」が開催された。パネルおよび模型などを展示し、市民へ公開した。2日間で558名の来場者があり、盛況のうちに催しを終了した。

鹿児島地区では、11月13日に天文館ぴらも〜る等で「土木フェスタ in ぴらも〜る2021」が開催された。パネル展示、建設機械展示、砂防ダム実験等が行われ、家族連れなど延べ約5000人が体験・見学された。



「土木フェスタ in ぴらも〜る 2021」(鹿児島地区)

沖縄地区では、11月26日にパレット市民劇場(那覇市)で第26回「沖縄の土木技術を世界に発信する会」シンポジウム「沖縄におけるI-Constructionの展開」大きく変わる建設業の未来」が開催され、159人の方々に参加された。